

うるま市地域活動支援助成事業の取り組み紹介

うるま市では地域が主役のまちづくり、協働のまちづくりに向けた市民の意識の高揚と市民参画を図ることを目的とした「うるま市地域活動支援事業」を実施しております。

平成23年度は、11団体の活動に助成を行いました。その団体の活動を紹介します。

① 沖縄のわらべ唄普及研究会 うぶつちゆぬ会

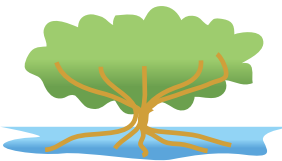


人が集う古民家での活動を中心に、わらべ唄、沖縄の文化の継承、普及、発信事業を行っています。平成23年度の主な活動内容は、ムーチャー作りを通して天願小学校の親子交流や天願老人会とわらべ唄ミニコンサートを開催するなど地域との交流活動を行いました。



② 特定非営利活動法人 マングローブE.E.K.クラブ

うるま市州崎マングローブ域を資源として環境学習やスタディーツアーを行っています。地域の子どもと大人が協働で「マングローブで海の森づくり」としてヒルギの育苗から植樹活動、クリーン活動を行いました。「環境学習出前講座」や「体験学習」など地域支援活動にも取り組み、学校との連携も定着してきました。



中城湾港新港地区 企業紹介



株式会社琉SOK
むら しみ えい いち
代表取締役 村上 英一

株式会社琉SOKは、平成22年4月に東京で沖縄の若い技術者の育成を始め、当初は5名からスタート。同年10月に国際物流拠点産業集積地域（旧特別自由貿易地域）に進出。本年4月には新しい社員2名を迎え、現在、社員10名と成長した。社員は全て沖縄県出身者である。

同社は、半導体製造装置向け超音波流量計、及び精密な面積式ガラス流量計を製造している。流量計とはガス、あるいは液体の量を量り、その量を調整する装置のこと。この分野はニッチな産業（隙間産業）であり、世界的にも製造しているところは少ない。特に面積式ガラス流量計は、作れる職人が少なくなり、日本国内そして世界においても製造することが極めて難しい分野となっている。このガラス式流量計を製造する工場では、村上氏が自ら設計した機械を沖縄県出身の技術者たちが操作し製品を製造している。

同社が沖縄に進出した理由は、まず村上氏が、沖縄が大好きだからということ。また、東京のグループ会社の工場が狭隘化し、次の拠点を考える中で、世界シェア約50%の製品を製造している企業の責任と、取引先への信頼を保つことから、地震などの災害に対するリスクを分散するため、沖縄への進出を決めた。それに加えて電力の供給事情が安定していることも理由の一つ。

村上氏は、「ニッチなマーケットは大量生産するほどの量ではなく、高付加価値の製品であれば沖縄で製造しても十分な競争力がある」と話し、今後の展望として、「精密なガラス式流量計は今後日本国内において琉SOK以外は作れなくなるだろう」と予測しており、「弊社が沖縄で坦々と実績を積み上げる中で、その結果として社員・技術者が育ち、利益が生まれる」と説明した。

また、村上氏は、「モノづくりは、人間がもっているポテンシャル（可能性）、才能、根気、そして実行する気概が大事。好奇心と意欲があれば最新鋭の機械さえ生み出すことができる。その意味でモノづくりは、学歴とは関係のないところにある」と、モノづくりに対する村上氏の考え方を語っていただいた。